南総里見八犬傳第九輯巻三

イ曽4特
600
281

特
1
500
281

南總里見八犬傳第九輯卷之四十二下

東都　曲亭主人編次

第百七十回

神變を操りて伏姫猶子の初陣を華やかなるを
舊君を謁しく信乃父祖の忠義を詳かに

是より先に犬塚信乃戌孝杉倉武者丞直元及犬江親兵衛仁等は新参の義士政木大全孝嗣並に石亀次郎大越鄕二向水五十三太枝獨鈷素る吉須々利壇五郎二西的寄舍五郎等の義士と其徒さへうち合せ一隊の若ヨメく従へく。十二月八日の下晡に岡山の陣営をかへ来る程に義通君は自家勝軍のより吟えて時東六郎辰相が薦め亦本よりて岡の陣営ゆゑ鳥山真人以下老煉の士卒一千有餘を留め戍らせて既に國府臺の城へ還らせ給ふと吟えりき。信乃等は徑に笹間斫河を舫渡りて。甚臺の城に歸陣す。隨即東辰相に就く。

寄隊は皆敗績なく。迹なく落亡せり。政木孝嗣ども義侠勤軍戰功の多。犬江親兵衛が歸東武功拔萃の多。並ひ姥雪代四郎直塚紀二六漕地喜勘太ども。武勇の挺拔の多又二四的寄舍五郎須々利壇五郎ども忠戰の多。又犬江親兵衛が意見とおもく。神授の靈丹を施行して自家の士卒いけるを敵とひとども忠死の者は死を起し生ひ回して降らんと請ふ者は是を留め。本貫ひかの去すく願ふ者は。饒して放ち遣るべし。但し滸我の佞臣横堀在村新織素行は信乃ひ射て斃されし時土民が其首を捕く。齎せ積悪天罰の多又犬飼現八も猶殘燼を鎮んが為ひ。權且假名町ひ在陣の多。又真間井樅二郎姥雪代四郎直塚紀二六漕地喜勘太は或は施茱の頭人を奉り。或は施茱の裁領とく。猶昨今の戰場ひ在勤の多。今朝いも寄隊の三將再戰の時那野豬六十五頭又忽焉と見れ歩く。自家を援けく。寄隊を敗り。出没不測の多。漏も

とるく告亨ホーしが。義通感悅のべるもあるぶ。その宵正廳ひ少すく。信乃親兵衛並ひ直元喬梁政木孝嗣を召よせて。對面ホのひけり。ホの他犬飼現八田税逸友も尚假名町の陣中ひ在り。又洞就鳥ども古内美容。深痍を負ふく。臥てあの城内ひ在りしと。親兵衛が來るひ及びて。又神茱の奇效ひよりて。亟ひ愈るとなるに。只ひ古内のみならず。鄕ひ義通の從軍たる者の。痍を負へる。皆親兵衛が神茱ひて。一人も恙なかりけり。又次國太鄕三五十三大素ども吉ども。義俠とへども町人又直塚紀二六漕地喜勘太は再臣なり。又須々利壇五郎二四的寄舍五郎ども。他鄕の野武士なれども。ホ俱ひ功あるべけれども。防禦使及隊長なりと。必同列なるべくぶとく。是ども次の日。犬飼現八田税逸友姥雪代四郎ども。かくて。義通君ひ拜見の後。另ひ皆乃口少されて。功を答させの。ひけり。間話休題。ホの宵義通君は犬塚信乃。犬江親兵衛。杉倉武者助

寄隊い皆敗績をく。迹をく落亡せるの。政木孝嗣们ゞ義侠勘軍戰功のの。
犬江親兵衛ゞ歸東武功抜萃のの。並ゐ姥雪代四郎直塚紀二六漕地喜勘
太ゞ。武勇の梓ゝのの又二四的寄舍五郎須々利壇五郎们ゞ忠戰のの又犬江
親兵衛ゞ意見をもく。神授の靈丹を施行して自家の士卒いけるを敵とゐども
忠死の者い死と起し生ゐ回して。降らんと請ふ者い是を留め本貫ゐかの去すく願
ゐ者い饒して放ち遣るのの。但し滸我の佞臣横堀在村新織素行い信乃ゐ射て
斃され時土民ゞ其首を捕く。齎せ積悪天罰のの又犬飼現八を猶殘
燼を鎮ん為ゐ。權且假名町ゐ在陣のの又真間井樅二郎姥雪代四郎直塚
紀二六漕地喜勘太い或い施茱の頭人を奉り或い施茱の裁領とく。猶
昨今の戰場ゐ在勤のの。今朝も寄隊の三將再戰の時那野豬六十五頭又
忽焉と見れ失く。自家を援けく。寄隊を敗り。出没不測のの。漏さ

てをく告亨ゐ。義通感悅のべるもあるぞ。ゐの宵正廳ゐ出ずく。信乃親
兵衛並ゐ直元喬梁政木孝嗣を召よせて。對面ゐのけり。ゐの他犬飼現
八田税逸友を尚假名町の陣中ゐ在り。又潤鼠ゐ古内美容い深痍を
負ふく。臥てゐの城内ゐ在りと。親兵衛ゞ来るゐ及びて。又神茱の奇效ゐ
亟ゐ愈ることゐ。只ゐ古内のみをゐ郷高ゐ義通の従軍たる者の。痍を負へる
皆親兵衛ゞ神茱ゐ。一人も恙をるけり。又次國太郎二五十三大素ゐ古们い
義侠といへども町人又直塚紀二六漕地喜勘太い再臣の。又須々利壇五
郎二四的寄舍五郎们い。他郷の野武士なれども。ゐ俱ゐ功いあるべけれども防禦
使及隊長ゐと。必同列をるべくゐとく。是ゆ
代四郎ゐかり来て。義通君ゐ拜見の後另ゐ皆刀ゐ出されて。功を賞さるの
ひけり。間話休題。ゐの宵義通君い犬塚信乃。犬江親兵衛。杉倉武者助

継橋綿四郎政木大全を召よせく。而茶の礼を賜ふ。東六郎執達さう。給侍ゆゑ七浦六郎朝夷三弥白濱七郎を侍りけゝ。當下義通ハ信乃親兵衛大全ゆゑ軍功を誉させく。うち譚ひゆゑ。昱裏ハ犬飼現八ゆゑ。斎藤兵衛太郎を生拘りく。當城へまゐらせ。是軍功の首ゆゑ。今日ハ又寄隊の副将上杉五郎憲房を擒ふ。岡の陣営へ牽せ。其勲功。全く現八ゆゑ。然りけれども。信乃ゆゑ火豬の謀をゆゑ。寄隊の戰車を焼くゆゑ。今日の全勝ゆゑ。有徳れば其軍功ハ正副伯仲ゆゑ。欲是ハ似るべくもあらぬ。咱等ハ二大士と直元逸友ゆゑ。閧戰を援んとく。曩ハ岡山より出陣ゆゑ。途ハ長尾景春の二隊の勍兵ハ撞見て。閧戰難義ハ及び。折思ひ付ゆゑ。政木大全ゆゑ。親兵衛と交遊の義ハ仗りく。他ハ立ゆゑ代らんとく。同憂同宿の義士次四太郎二三

五十三大素ゆゑ吉とゆゑ者と共侶ハ其徒六七十を従へく。突然とく援け来ゆゑ。那鋒矢を折けども尚勝負を分ざりゝハ又幸ひハ親兵衛ゆゑ。京都よりかへりゆゑ。伴當瑕兵新参の義士們と倶ハ數十名残りく援て一瞬間ハ那勍敵を殺頽し斃ゆゑ走らして。剰景春の愛子と少え。長尾為景を擒ハく。當城へ進らせ。我面をしも起こる。這大功ハ信乃現八ハ拮掉をとゝいはくのゑ孰を伯と。孰を仲とせん。只感悦の外あらぬと。年ゆゑ倍て怜利ゆゑ。詞委ゆく稱へゆゑ。辰相是を執合して。御諚畏ゆゑ。抑二大士の才幹武勇ハ左右ゆゑ。ゆゑくもひゆゑども。就中犬江仁ゆゑ。殺伐攻戰の場ハ干て。仁慈の心を喪ゆゑ。敵ハ施某の一條ハ宋襄の仁ハ似れども。武をりて人を征る者ゆゑ。威勢必長久ゆゑ。德をりく人を征る者ハ十世の後まで川流ゆゑ。淳和せ。則是館の御本意ゆゑ。親兵衛ゆゑく仕ゆゑ。と誉ゆゑ。親兵

継橋綿四郎政木大全を召よせく。而茶の礼を賜ふ。東六郎執達さう。給侍ゆゑ七浦六郎朝夷三弥。白濱七郎を侍りけゐ。當下義通ハ信乃親兵衛大全ゆゑ。軍功を称さゐく。うち譚ひゐ。是義ハ犬飼現八ゆ。斎藤兵衛太郎を生拘りく。當城へまゐらせ。是軍功の首ゆく。今日ゆ又寄隊の副将上杉五郎憲房を擒ふ。岡の陣営へ牽せ。其勲功。全く現八ゆ似ゐ。然りけれども。信乃ゆ火豬の謀をゆ。寄隊の戰車を焼くふゆゑ。今日の全勝ゆゐ。有恁れば其軍功ゆ正副伯仲ゆ。是ハ似るべくもあらぬ。咱ゆ二大士と直元逸友ゆ。開戰を援んと。曩ゆ岡山より出陣ゆ。途ゆ長尾景春の二隊の勍兵ゆ撞見て。開戰難義ゆ及び。折思ひ。政木大全ゆ。親兵衛と交遊の義ゆ仗り。他ゆ立ゆ代らんと。同憂同宿の義士。次因太郎二三

五十三大素ゆ吉とゆ者と共侶ゆ其徒六七十を従へく。突然とく援け来ゆ。那鋒矢を折けども尚勝負を分ざりゆ又幸ひゆ親兵衛ゆ京都よりかへり来ゆ。伴當數兵新参の義士們と倶ゆ數十名ゆ。援て一瞬間ゆ那勍敵ゆ。殺頽し斃ゆ走らして。剩景春の愛子と雖ども。長尾為景を擒ゆく。當城へ進らせ。我面をゆ起しゆる。這大功ハ信乃現八ゆ。拮掉をとゐいまくのゆ。孰を伯と。孰を仲とせん。只感悅の外ゆらぬと。年ゆ倍て怜利ゆ。詞委ゆく稱へゆゑ。辰相是を執合して。御諚畏ゆ美りゐゐ。抑二大士の才幹武勇ハ左右ゆ。べくもあらぬ。就中犬江仁ゆ。殺伐攻戰の場ゆ。干て仁慈の心を喪ゆ。敵ゆ施ゆ。某の一條ハ宋襄の仁ゆ似ゐ。れども。武をゆて人を征ゆる者ゆ威勢必長久ゆらぬ。德をゆく人を征ゆる者ハ十世の後まで川流ゆく。淳ゆ。則是館の御本意ゆゆ。と。誉ゆ。親兵衛ゆく仕ゆ。と。親兵

衛推禁めそ。御家老仁を差殺るまゐひそ。館の御盛徳い格別〳〵臣もハ
今日迄そ今日兼り。御軍令ふ従ふのミ。細人の威勢ゐるハ敢忌憚ることを。
懲〻て新ふ做まふあるぞい爭ひ已とゑるゑ所べ。と思ふ。ゑるの所ゑるゑと辭
ふを信乃い諾ゑひく。其言愚意も相似ゑり。譬ば那霊豬の如ゑハ牙ふ蕉
火を結着〳〵れば。戰車を焼ゑ〻ハ然ることゑるとも。其折一頭も火ふ死ぬ。
又敵ふも撻殺されぞ征方も知ぞゑりけるふ。亦再戰の折ふ顕れ出く。自家を
援けて敵の騎馬を駈仆〻又駈破りて撥消せ如く見えぞゑりゆゑ意ふふ
這奇事い。則當家を守りゆふ伏姫神の真助ゑるぞい。猛ゑ獸のいふ〻く。
德ゑ掙ゑを做ゑとあゑんゑ畢竟我君年來の御善政の餘福ゆく臣ゑるゞ
功德ゑふゑるを御褒賞い倒せ當りゑ〻ゆと謝ゑるを義通君推禁ゑ
信乃其霊豬のゑハも又一層の奇事ゑり。六郎見ふ告ぞゑと仰ふ辰相

阿と応て膝を找めく談ゑゑり。犬塚犬江自餘の人々も听ねか。御ふ郎
君岡山より御歸城の談定り〻既ふ出んとゑゆふ程ふ怪むべ。一箇の野豬
大ゑさ犢ふゑり。ゑゞ一個の武者の鎧の表帶ゑ牙ふ引掛け背ふ載て走ると
飛鳥の如く。岡ふ登り。郎君の御馬前ふゑよければ。伴の衆兵吐嗟と騒
ゞく。防ゞ禁んとせ〻程ふ野豬い背ゑる武者を撞と振隊ゑて走り〻往
方い知ぞゑりゆゑ。ゑゑ未曾有の奇事ゑれば咱ゑり則雜兵ふ件の武者を
扶起さゑ〻よく見ゑふ大将品の人ゑるべ。戎衣都て綺羅雄ゑるゞ既ふ半
生半死ゑ在り〻ゑば葉ゑ與へ勦せく。且其姓名来歴を鞫問ゑるふ其武
者いゑざることゑるぞ則寄隊の大将ゑ。滸我の左兵備督成氏ゑ御ふ自家
敗軍の折鈍くゑ暴豬ふ馬を仆されて。身も駈られゑと思ひのミさへ〻ゑく
來ゑるを覚ぞ。意ふふ這里ハ敵陣ゑゑん。命運の傾く所今ゆゑ免ゑふ路

あるぞ。左も右もせられよと陳じぬひらば。咱答ふらく。御推量の如く這地方は岡山の陣営ゆく。目今義通歸城の折へ御心易く思召ね寡君義成は仁人なるふ。父祖の舊交もいへば御命ふ及ぶべくもあらぬ。先岡府墓の城へ俱ーまろうん。卒ぬへと慰めくそぐ儘馬ふ扶け乘せく。士卒ふ殿ふ守せく。當城内へ俱ーて歩ら。則一室ふ屏籠て番士を置て守らせつ。獨那君のもとそぐ犬飼犬江ゲ擒ふく。當城内へまあらせー。憲房主あり。為景孺子あり。又那齋藤盛実あり。ともに共人之隊長なれば各檻室と異ふーて衛士ヨヌく附置ぬ。城内賓客ヨヌく是和殿なるの柄之愛ぞるふあらぬもと告るふ感ぞる。親兵衛はちへ直元はちへ驚くまぞ且呆れ且歎びく答るまつ原来かの折成氏主も靈野豬ふ駈られく岡山へゆく去られー狡臣なるい鬪戰稍克ふく。敵を漏さでと思ひーのを。然る光景を見ざれば知らぬ。さそもく。

だるゆく。悟るふ由もなるけり。當下信乃は謹く。辰相ふ答るまつ。目今創て美る那靈豬の掙ぬは実ふ奇中の一大奇事ふて人のよく做ぬべるなるふあらぬ初臣なるは翁所斫河をうち渡ーて。寄隊を逆へく戰ひーるども成氏主の一隊ふ直元逸友をのを相向はせく臣なるは一トさびも前を飛ー。鋒を交へはいぬ。其故如何とるらば。那君は臣なるが大父大塚匠作の主筋あく。父番作も當初は其餘禄とりく。成長れり。又義兄弟犬飼現八ぐ為ふは是現在の故主之。今は恩仇地を易く。讐敵の思ひをせるくとも只君命をのを倡て。鋒を交へ翁所を飛ー。戰ひ克て或は生拘り或は其首を捕らば。人其是を何とらいん。君子の忍びざる所なれば正人ふは憎るべー。之の故ふ今日の再戰ふも臣なるは真泪井秋季を為く。頭定主と桃を戰ひ現八を亦継橋喬梁を副て憲房主と戰ふく。却成氏主の一隊ふは杉倉と田税を指向く。三面俱ふ戰克

去い霊豬の援ふよりてるり。仆るふかの折直元逸友両個をもて成氏主を擒ふ
せび臣ども做まふあらねども臣ども防禦の正使ゆく其軍配い外るゝぞ則
臣ども隊配るれば五十歩百歩の差池あるのを臣ども擒ふ做せ同じ。この
故ふ神明地霊那霊豬とのゝ成氏主を駈駝せそ。岡山るふ御陣へ餽りく。
のく郎君の御るふ入れく。這回郎君初陣の御ゆ柄ふ做されーゞ臣ども故主を
擒ふまと云悪名を冠ぎるりあれと。今とを悟れ其奇其妙。凡智ふ量知られ
や。必是伏姫神の神通廣大ゆて物ふ憑ゆふ真助ふ疑ひるふべ。と思ふ
も疎ふひゆめと心の誠うち出く。言細やるふ解諭せび義通感悦ゆぐもあらぎ。
況や辰相直元孝嗣ども説れて思旋らせび。信乃ゞ誠心始と云れを曩ゆる
飽ども情ゆアー那君とーも怨ることる理義分明る高論い人の惑ひを醒
まふ足れり。ども学問の力ふそと感嘆まれば親兵衛も有理々々然んと。

黙頭く。扈言ん。とぞ稱へけ。然び義通凱陣の後。ふの弐を厳君義成
主ふ告ゆひーゞ。義成則箭斫河原ふ麿利支天神へ堂料五十貫
文を寄布まゆひく。且其堂内ふ伏姫神の神號木主を置くとを。許を
べ。と制度せるる是ふよりく。麿利支天の別當西妙。並ふ初那野豬六十
五頭と虚舟より援陟ーて。養置ける荘客们ふ米銭許多賜りーゞ皆囚
恩を拜戴ーく。欽ざるいるりけり。ふる是後の話へ却説。ふの宵囚府臺
る城内ふ。信乃ども云云と談ーー亶を程ふ小夜深ーるぞ。親兵衛則
計ひ亶ーー政木大全い苦戰の疲労あるん。疾憩室へ退りく。睡ふ就べ
そ。身の暇と賜ひーゞ。案内者ども孝嗣と俱ーて外面へ退出ふけ。登時信
乃い又辰相ども談ーるもう。ふの地の大敵皆散落ーて。稍静悄ふ垂とる。
明日い夙めく急遽脚の使者ゝ洲崎の御陣へまわらせて。先ふの弐を告まる

て。且那里の御安危を伺ひなほさざいあるべくもぞ。但し彩徳口なる防禦使莊
次小文五吾いらるるや。先他名ふ仰合されざい不便ふそゆゑめと謂されぞ亦
親兵衛も俱よりゆゑ。臣名い京師より御使を果し来くゆゑ。稲村へ進ら
ざれども。鄙ふ信乃を偽達せられて。防禦使たるべ死よりの台命を奉り且御
大刀さへ賜りられば。寄敵あの地ふ在らん程い閉戰を援けなるべ。寄敵
既ふ退くるふ猶當城ふ掩留せば。怠れるよ似く。不忠なるべくやとの議論を辰
相うち守て。犬士の意見其理あり。然らば行徳へ振照倶教二を遣して。
那里の安危を問もべ。又洲崎の御陣へ。継橋綿四郎をまゐらせて。あの地の
勝軍を注進せん。犬江生い従来の駑兵両三名をそ。歸東の義を告な
て。寄敵弥在らば。その折稲村へ参るともいまだ遅死ふあらざるべ。
と謂されば。犬士あの意ふ儘せく。直元と共侶ふ退りて連署の注進状を

筆吏ふ寫せるども既ふして。暁天ふ及しぬ。時候振照倶教二弘経い義通君れ
命ふよりて。駑兵幾名ら領て。彩徳口なる。犬川大田ら陣営ふ赴死ふ。那里
より莊次小文五吾の使として。満呂再太郎信重と。安西就次景重ら隊の
兵を分て。快船ふうち乗りて。暴河を渉り来て。犬川大田ら勝軍の告文
と。信乃現八へ與る書状を呈覧せ是ふよりて。這再太郎い。満呂復五郎
重時の養嗣なるべ若なりも。又就次い安西出来次ら獨子なる所よりも
知られて。那里の閉戰ふ莊次小文五ら。千葉自胤と大石憲重原胤久を
擒ふ。乱久い深痍ゆ。命危死よりも告文ふ載なるふ且再太郎就次
ら口状ゆく。臭んければ東辰相鈍び誓て。這両個の少年を見参ふ入を
ばば義通則再太郎就次ふ牽出物を賜りて。則這里よりも方僅
振照弘経を遣せらば若们ら還らるざる以前ふ這方のみい知らるべ。只

その上に館へ注進をいそぐべしと仰合させく。身の暇を賜ひけり。その時犬江親兵衛に那里ゆも刀瘡児ヨヲーと呼く。則神茱一盒を荘介小文五郎に魄り遣せしが那隊の士卒の重瘡にはいくゝ原亂久の如く必死の人も死ざるを沿とりけり。偖而継橋綿四郎喬梁と犬江親兵衛ゞ覇兵毎にその朝安房へ急遽脚の使を差らく。洲崎の陣営へ赴けり。有偖り〜程に五十二太素る吉に次囲太鄭二名と倶に見参の礼果て両囲河原へ退らんと請ひ義通固く留めゆへども他們に只に氣を使ひ任侠を磨くのをゆく。武士に活業をゆ欲りせぎを熟くる活業もひへ枉く身の暇を賜るべしと願ひ稟まふより親兵衛孝嗣も是を禁るふ術るなきよりと呼え上ーるべ則五十二太素る士長名三八七十名に當坐の賞禄をヨヲく賜りく異日稲村より召れるべ必まるべしと仰せらる。その時亦孝嗣も意衷を陳て既に犬江に代らまく欲りき。志い果〜ら。今に犬江のかゝる来て且寄敵落亡くれば。その地に所用る身に向水們と共侶に退るべしを親兵衛何でか饒ぎ義通君も其言を伝へ吟て放ちゆへくもあらば。晉待ゆく厚らければ孝嗣に今ふ辭ひ稟さんにさをゞゆく只得次囲太鄭二名と倶に當城に留りけり。亦程に犬飼現八も寄隊敗軍の往方を穿鑿果て田税逸友と倶に假名町を退陣て當城へかゝり来ゆる程に爺斫河を思ひけるに水路の敵将扇谷式部少輔朝寧の水死を甦生らせ更に擒にはゆるように既に上に見えるる如く現八及力助逸友等に敵将足利成氏を霊野豬ゞ駈廟て義通君の初陣の華に做せとの奇談に胆を淡ら相賀して逆友と共侶に義通君に見参に又真間井樅二郎姥雪代四郎直塚紀二六漕地喜勘太等に神茱施行の事果て。その日の曛昏に

かゝる事ふければ。親兵衛い明日の早天ふ代四郎以下の毎と。孝嗣次囲太郎三名。寄舎五郎壇五郎。その黨さへ相伴ひく。安房へ還まく欲ゝ。悠遽ーに折るれば。親兵衛ゞ京師ゆくありーゆ。又歸路のゆい義通君ゆも辰相ゆ。告るふ具ゆ。ゆるりめらゝ。事ふ觸てい吟知る者あり。然りでも信乃ら名ゞ少つる隨ふ義通君ふ告禀せゝゞ。人咸これを知ざるいるく。奇異ふ驚に武勇と誉てゆく。茶話ゆぞ。ゆくりける。間話休題。介程ふ信乃親兵衛い。敵とへども生口の敗將隊長を侮り卑めぎ。義通君ふ吟ゝえ上て其款待ふ名ゞ困ゆく。敬言固の士卒を儆めく。礼るゆを饒さでーゞ。現八も共侶ふ。三四室ゆる囚囚を看輪りく。憲房為景盛実名ゞ問慰るふ憲房為景ゆ羞く頭を拾げるぎ。衣うち被ぎく。陽睡ーて居り。又成氏の身邊ふ造るふ是ゆ亦敬言固の士卒ゆうち圍れく。燈燭の下ゆる祠の上ふ坐ーてゆと

又き頭を低く存り。當下信乃現八親兵衛い鎖を衛子名ふ啓せそ。俱ふ檻室の内ふ找ゝ入く。額衝ゞ拜ーて安否を諮へ。成氏い驚ゞるゆ。て解ゞ急ふ礼を返ーて。和殿名ゆ是誰ぞと問ふ。問れて信乃い膝を找めて。敬く答るゆう。早くゆ忘れさせゆる狡臣名ゆい則生人ゆぎ。君ゞ兄ふ御坐せ。春王君安王君の小傅ゆりける。武藏國豊嶋郡の人氏大塚匠作一戍ゞ孫大塚番作一成ゞ獨子ゆる。犬塚信乃金礎成孝ふてふ。恁禀さゞ言故ふれど往時嘉吉の擾乱ふ結城十萬の義兵三稔を歷く。竟ふ弓折矢勢竭く。両公達い敵の為ふ俘囚と做り玉ひ。折臣名ゞ大父三戍ら殺く。出猶戰ゆく。陣歿をゆそけり。と口碑ふ傳へゝり。當時番作十八歳父の遺訓より重囲を殺脱。像見の名刀村雨丸を腰ふ帶ゆ。両公達の去向を悄地ふ踉まりく。美濃の垂井ふ至る程ふ痛ーゆる両公達い金蓮寺ゆそ御事ゆ。

番作い其御終写を見るふ沿堪ぎ。奮然と跳り出て創るの武士と呂い一刀ふ斫仆して。両公達の御首級を奪合るらく。辛くして多勢の敵と殺脱る。信濃路ふ来よけれい路傍る道場ふ。両公達の御首級を悄地ふ瘞めたまらゆ。介るふ当晩番作い宿を投め。草庵ゆくゆ東と呼ぶ。少女ふ逢ぬ。開い結髪の妻ゆく。其父も亦結城ゆく匠作と倶ふ陣歿ぎ。母さへ早く世を去りく。所寓る元身の今ゆくふ天縁の熟ぎる所遂ふ迭ふ捨るふ忍びぎ。則是臣ぎるが母へ折るく父い金蓮寺ゆ受くる。痛痍ふ堪ざれば。蒐麻ふ赴ぎ湯治して。稍刀瘡い愈されども。是より行歩自由なられば。夫婦相推乃て。辛くして故郷る。武蔵の大塚ふかり来り。是より氏を改めく犬塚と呼ぶ。兵法武藝を郷黨ふ教へく年を歴る。隨ふ臣ぎと生ひ。幸るぎい只是のみるで。母い臣ぎるが六七歳の比。舊病重りて身故りぬ。

父も年来多く病るりーふ。則父の姉壻る大塚墓六と呼ぶ。細人ぎ。則大塚の郷の荘官ゆく。其心術便僻くり。且我父の姉亀絛も同思ゆく憑ーくるぎ。父が年来秘蔵せる村雨丸の名刀を。言ふ假托け術とりく。奪合るくまく。欲せーと。父い猜ぎて。防げども既ゆく年闌く。病痾旦夕ふ身ふ逼るとゆく。命長くるーと。覚期ぎく。一夕臣ぎるふ父祖の忠義と。村雨の大刀の偽来を。説示せと。右の如く。汝成長りー時。滸我の御所へ参上りて。這名刀を献りく。且其大刀の偽来と父祖の忠義を。多え上て。仕官を願ひなれと。教る詞の露るくて。光王るも刀を抜く。腹掻斫く。俯伏るぎの時。臣ぎるが十二歳。親の送訓ふ従ふく。憑ーくるぎ。伯母夫婦。許養まく。堪かぎ。艱苦を忍ぶ年を。歴て。身い稍成長りーふ。今茲より六稔以前文明十年夏月の時候。臣ぎる滸我ふ赴ぎく。隨即御所ふ伺候ぎく。村雨の大

成氏擒ふなりく
夜三大士千吊
慰めらる

刀を進らせ。猶思慮足らぎして。其名刀八反人ふ拔易られ。を悟らぎり。
況然ば横堀在村ぐ贋物と看破りく一言半句も分説を听ぎ反く
臣等を隣囲の間諜児るべーとく。猛ふ居まの力士ふ課く搦捕せんと
欲せーぐ臣等勢ひ已に迫るぎ。緝捕の力士を殺拂ひて芳流閣と喚做
たる。高樓の屋上ふ攀登りく。脱れ去まく欲せー程ふ。御内の力士犬飼見八
ぐ。登り来ぬるふ組打して両失脚あり。滾落く。閣下る河邊ふ在りける。船ふ
受られ。纜断離れて。身ハ氣絶して在りー程。船ハ急湍ふ推流さまく。行
徳の浦ふ寓りーを。當日地方の豪傑大田小文五吾親子ふ救れく。死ざる
こを得れども。滸我ゆく受くる刀傷の破傷風ふ做りーぐ。身ハ病臥く
古那屋ふ在り。古那屋ハ則小文五吾の親。文五兵衛ぐ歇店の號ハ折ら横堀
在村ぐ沙汰して。御内の侍新織帆大丈素彷ぐ臣等を緝捕の頭人を奉

ぁく。鞍兵を多く従へて。彷徳へ来て。穿數金りーぐ。臣等ぐ窮厄逼迫て免
るべうもあらぎりーを。小文吾ぐ妹夫這里ふ住る。犬江親兵衛ぐ父ハけ。義
士山林房八ぐ其ハ妻共侶身を殺ふ。其鮮血をりて。臣等ぐ痍ふ濺ぎー
ぐ。奇莱の效衍ぎ。我破傷風亟ふ愈て。身ハ口ハ恙るこを得るのこを
ら。房八ぐ面影のよく臣等ふ肖るふより。小文吾則其首をりて。新織帆
大丈を欺紀還して。再厄遂ふ解けられば。義兄弟と共侶ふ遊歴浮浪六个
年を厳止る程ふ臣等ハ同因果の義兄弟倶ふ犬をりく。庵字ふ做せる者八
人るべ紀よりも知れ且未生以前より里見殿ふ宿因ありく。家臣るべ紀ーを
悟れども。ぐまぐ其時至らぎりーふ今茲の夏四月の時候君臣の天縁竟ふ熟
あく。皆共侶ふ安房へ徴れく。寵遇特ふ浅くぎ。恁而這回の鬨戰ふ臣等と
犬飼現八を義通の隊ふ隷られて。則這地の防御使ら。聊螳臂を抗ー

より。連勝して這田地ふ至れり。遮莫微功ふ誇んとて家の賤譜を禀さ
あらぬ。吾父祖の忠魂義胆を御聴ふ入れんとそヨヌ辯ふ及びぬ。其将六日ゞ
菖蒲るべく。十日の菊ふ似くれども。この折をもて先人の志を告まつらぬ不孝
るゝんと思ひよりて。言憚りるくゆひたと心の誠うち出ゞ。言葉ふ説果てゆきう後
方を見くるゝ。身を退ゝ甚そ坐を譲れば現八やゝゝ膝を找ゆて。成氏王ふ
向ひく。額衝て且告るゝう。臣等い素是微賤の小卒徒る瀬ふ立ゆらぶ御視
徽を饒されんや。然るを恐尺去ありく。名生ロるハ烏滸ふ似べども。本貫ハ上總
ゆく。武蔵る豊嶋大塚の氓。他衛より流寓の民を祖とふ。糠介が獨子るりーと。襁褓の中
より御内の走卒。犬飼見兵衛ふ養れて滸我の藩中ゆく成長りれ。養
父没して。卑職を嗣ゞ。則犬飼見八と唱れーハ一要時の程ゆく。今ゑ里
見の防禦使る犬飼現八金碗信道ゑ。ハ臣等る貴藩ふ在りー日い

兵員るゝ。卑職ゑれども君ふ仕へく私るく忠義を盡さふ至りてハ。禄のヨヌ
少と職の尊卑ふ依るべくもいゑ。是をもく髫歳ゝりー初より。師を撰ゑ技を
励ゞく。兵法七書弓馬剣術緝捕白打ふ至るまで。学びゆゑとふとゝ。然り
けれども。御内の冢宰横堀史在村い能ゑ媚ゑて賢ゑ挙げゑ。反て臣等ゑ媚
ゑ求るとゑ。ゑを憎ゑて職を轉じて獄吏ふ做ー。臣等ハ牢獄の小吏ゝりと。
其情願ふあらざれば屡弊ひ伐りーゑ。在村不敬の罪とー誣て臣等ゑ牢獄ふ
繋ぎゑる。恁而一日。大塚信乃ゑ緝捕の力士们芳流閣上ふ桃ゑ負て死を
致ゑ者ヨヌゝーゝ。在村則計ひ亨ーゝ臣等ゑ獄舍より饒ー出ゑ。件の
緝捕を課ーゝ。臣等則芳流閣上ふ攀登りく。組打の顛末ハ目今信
乃ゑ口状ふ具ゑ然ゑ。その折氣絶して。舫ゑ徳ゑ流れ来つ。我ふ復りて由来ゑ
問ゑふ。信乃ハ疎忽の失ゑるのゑ。捕ゑるゑ罪ふゆゝ。且臣等ゑ実父糠

人は則信乃と同郷なり。信乃を紹介のる簡あり。奇遇は又口とれのミ。

信乃と臣等は宿因あり。異姓の弟兄なるべし。徴は迭ふ身の内ふ痣あり。

形牡丹の花ふ似たり。又感得の霊玉あり。小文五吾と親兵衛も同因同果の

痣あり。玉あり。八人なるべし。その中ふあの日この時小文五吾と四人相逢ふ事を沼

う。隠れば信乃は罪なき者ゑ必捕るべしと。然ばとて臣等只一人阿容

阿容と一と尚我へ還らば又其罪を詰せられく。必在村ゞ多ふ死ん進退

維谷りぬ。故ふ信乃と倶ふ躍れて彷徳の古那屋ふ居り是より浮浪

六稔を歴く。義兄弟等と共侶ふ召れて安房へ参りーにあも亦信乃ゞ口

状ふ具へ薄情なる君は只在村ゞ奸虐私論の誣言とのミ信容さ安ゆを

りく今も猶信乃と臣等を憎ーとのミ思ー召さるゆ。信乃と臣等ゞ意衰は

あるゝ非如恩仇地を易く。今君命ふ依るとのへども舊君故主を敵と

逆て。箭を飛ー鋒を舞と。死を爭ん本意ふあるべ。その故ふ始より君ゞ一隊の御陣

へは杉倉武者助直元田税力助逆友をのミ指向く。信乃と臣等は顕定親子の隊

と戦ひ料らず霊猪の援あり。君ゞ敗軍の時ふ臨ミそ。駈く背ふ乗せて我公子

義通の陣営ふ致せーは神明佛陀の冥助也。信乃と臣等ゞ始を忘まる胡馬の

北風燕鵲南枝の心を監ミるひけ。一大奇事也。ひとりれ成氏ゆ。羞て連

ふ額ふ汗をのミ答ふ及ばず。信乃は又慰ゆく君知ー召れぞ。鄙ふ横堀在

村と新織素彷は御陣の敗を見べ。二騎連立て落亡せ。底不知野の邊也。

臣等ゞ赴蒐く。射て斃ー。然るを地方の壮客ゞ其首を斬ん来て実検ふ入れ

ひ。官募君這回の軍令ふ只當の敵を撃ことを許て敵の首を捕る者と功とす。

然ると在村素彷は倶ふ死首を土民ふ捕られて軍門ふ梟られ。年來君を惑

あ。賢を害ひ民を虐げく。家を富ーなる天罰ふ七ひるると。鮮れて成氏嘆息て。

いろ〳〵顛末皆金玉に異らぬ我不明にして始より和郎等の賢良英才なるを思
ひ寄ずして鄰國の宝に做しなる悔の楚懐の憂に同じ烏の頭い白くなるとも生て辱我
〳〵還りかゝけん覚期に既に死ゆくと答て嗟歎に堪ざりけり登時大江親兵衛に我
を空く拜して殿さのこゝる歎せゐひそ臣等も里見の防禦使なる大江親兵
衛仁に倣ひ言自負に似て以ゝど寡君義成が仁義の家風に相従ふ我們
惻隱忠恕辭讓是非の分ひあ〳〵とらふりのるゝ。あゝとゝく昨今の閉戰に自家い
けゝ敵の士卒の或は深痍を負ひ或は戰死せ者は比皆是其君の為に命を惜れば
忠臣之豈是を憐ざらんや。去の故に臣等が秘藏の神薬を施ひて君が隊の兵と共
に〳〵る。科草七郎望見一郎去の他奇隊の士卒の死を救ひ其還らんと願ふの者は饒して
其主に復しに敵の士卒まさかくの如し。君に於て何ぞあらん義成安房へ迎まつそ。
舊交を偕めのけんと言叮寧に尉れば信乃現八も復共伯に臣等君を辱めんそ。

父祖の上さへ〳〵ち空て云云と言ふまでもあらぬ只其忠義の心操を知せまつらんと思ふのみ。
又汝見参せべけれと告別ぬ列外頁へ〳〵ち連立て退出けり。その時左右の檻室に
在る憲房為景盛実等の守護の士卒に至るまで這二大士の忠孝博愛
始て推て故を忘れ以真面目に是をありとそ感服せざるいなくけり。偖而大江親
兵衛に去の宵東辰相に意表を告て義通君に身の暇を請に程に真間井秋
季蛟雪代四郎直塚紀二六漕地喜勘太们に施芽の効果てしを来ふけりとそ親
兵衛に次の日の早天に信乃現八並に直元逸友以下の隊長諸頭人に相別れて。蛟
雪代四郎直塚紀二六漕地喜勘太们の伴當野兵及政木孝嗣石亀次郎太
越郷三四的寄合五郎須々利壇五郎と其隊の兵六十餘名を率て名馬青海
波に跨りて洲崎の陣営を赴くに昨日の朝洲崎に野兵両三名を参せて歸
東の義を注進まつりしに洲崎の凍の勝軍に既に朝寧主の口中ゆく為なれば。

今はいそぐ要るとて今番は路を貪らず先大川大田と訪ふ那里の勝軍の事の光景とよく尋問ひ知りて両館へ稟上んとそのの日彼徳へ立寄りけり然るの時荘介小文吾は猶今井河原の柵に在り昨日有持傍杖朝経と一二の精兵を洲崎の陣へ急遽脚の使ふらし起せり閑戦全勝の支並に生巳の交名を注進ふけるふとの日石濱の千葉の老黨士卒は自殺擒ふるりもと思ひ知りて驚き怕ること大くるるに然では這孤城を久しく抱かんとて主君の妻妾諸臣の宅眷と資財什物を各舟に執乗せて城を棄て落亡けりとの事を聞く河原の柵に在る者ありしが荘介小文吾うち笑ひて我ら捉ふ者ども開かば儘図らば野武士山賊の擄るとも有んとそ隨即登桐山八郎良干隊兵一千二三百と分ち授けて亟ふ石濱へ遣して件の城を守せけり有徒り程ふ今日とは知らず大江親兵衛姥雪代四郎ら政木大全石亀次園大越鯔三と新附の野武士三四的寄舎五郎須々利壇五郎們を相伴ひて國府臺より来ふれば迭の欲びに躍て柵の大

廳ふ賓主の席と設く月屬會話ふ時の移るを覚ぜず満呂復五郎再太郎安西就久大樟村主も這席末ふ列りく俱ふ欲びを盡にめり當下荘介小文吾は次園太郎うち對ひく曩裏ふ稲戸津衛ら好意を片見の躰処を脱れ去りし時足下の宿所へ立よて報知せまく思ひしかども人ふ知れんとを怕れて果さざりしとうち勧解れば又次園太郎三ハ毛野ら智計の帮助を再生さる欲びを便宜ありしふ今番ふ逢く時至りて安房へ赴くと云欲びを告るを主又荘介小文吾以下の毎ハ孝嗣の人と為りを最慕ふく思ひしかども其管待大江姥雪ふ異ふ又親兵衛は昨日餽られし神茉ゆく原亂久の深痍ハ此ふ之の他も刀瘡児ふ用ひて即効ありしとの者ふ但惜むらく戰死せし敵自家の士卒の骸ハ惴りそ皆埋めしかども神茉ふ至るとのへども其死を起さとなしらざ何ぞかく幸ふ起意ふ皆是足命數歟ハ欲然らざば業報ふ云主客の相譚ひ闌る時満呂再太郎と安西就久ら酌を執て盃を勧る程ふ日景ハ既ふ敬ハ

親兵衛孝嗣らを領て今井の柵に造り
小文吾

たかつぐ

文淵堂藏

たゞ親兵衛急ぎ別を告て且同伴の衆人をのそゞ立ち青海波の馬を牽せて今井河今又渡を船果て上總路投て立出けり然が親兵衛がその日の進止さそゞ待ち安房ゐ在を君と親とを弓閑ゐて只其情義の故とのて這頭ゐ路草茂喫けゐ相応ゝ〻ぞと思ふ者もあゝん并い人を知ざるゑ蓋這陸地二个所の閑戰ゐ一箇も軍監ゐ。親兵衛い悄地ゐ東辰相と商量あて且義通君の命を禀て其職を兼ゝれが異日軍功を媚む者の誣言を防んとて故意仍德へ立られゑ然ハ其の小集い私の一所以のゝゑゝぞ亦是公事ゐ〻ゐ既ゐく陸地二ヶ所の軍談い〻たつく〻ゐ說盡ゝ〻ゐ是より又洲崎の澳ゐる水戰い甚麽ぞ分教ゐ。赤壁阿瞞勢勿負燒殫艨艦有周郎。ゐる前板阪東將帥の像贊のゝ猶詳ゐ知ゐく欲さが又卷を改く。且下回ゐ說分るを聽ねかし。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十二下終